

2022年7月3日（聖霊降臨後第4主日、特定9、C年）

牧師メッセージ

「願いなさい。行きなさい」

（ルカによる福音書10:1-12, 16-20）

司祭ヨセフ太田信三

七十二は異邦民族の数を表すと言われます。七十二人の弟子たちの派遣とは、全世界へ福音を伝えるための出来事だということです。主イエスはこの七十二人に対し、宣教の旅において守らなければならないことを告げます。「収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」とあるように、彼らはまず「願う人」であることが求められています。さらに「行きなさい。わたしがあなたがたを遣わす。」と続きます。宣教とは、「願い」「派遣される」ことだということです。そして、願う先には神がおり、派遣するのは主イエスですから、宣教は弟子たちによるものではなく、その弟子たちを通して働く御父と御子の業なのです。

宣教者の後ろには神と主イエスとがおられます。それゆえ、「小羊」のように無力な人間であっても、「狼の群れ」からも守られ、使命を果たすことができます。背後に主イエスと神がおられるのだから、「財布も袋も履物も」必要はありません。むしろ自分の知識や経験、持ち物に頼るのではなく、積極的に主に寄り頼む宣教者を通してこそ、そこに神の働きが明らかにされるのです。

さらに弟子たちは、着いた先の家で「この家に平和があるように」と告げることが求められています。今日の福音の後半では、この七十二人によって「悪霊、サタン、敵」という、神と敵対する存在が屈服したことが報告されています。このことから、彼らが告げる平和とは神と対立する力が滅ぼされた状態のことだと言えます。平和を求める神は、わたしたちの命を祝福し、他者との愛の交わりに生かそうとします。しかし神と対立する力は、人から神の祝福を遠ざけ、他者との交わりを断ち、人を孤独に追いやります。それゆえ、派遣された者たちは、分断の原因である「違い」を超えることが求められます。具体的には、派遣先の家でも町でも、「出される物を食べ、また飲む」こと、さらには「家から家へと渡り歩く」のではなく、関係に留まることが求められます。その交わりにおいてこそ、人種、立場等あらゆる違いは、分断をもたらすものとしてではなく、多様な人々が共に食卓を囲む豊かさに変えられ、そこに神からの平和が実現するのです。

さて、派遣先から喜んで帰ってきた七十二人に主イエスは言います。「悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではいけません。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」悪霊を服従させた弟子たちは、自分が誇らしかったことでしょう。しかし、それをなさしめたのは神です。ですから、喜ぶべきは自らの行いではなく、神に憶えられていることです。

宣教とは御父と御子の業であり、わたしたちに求められているのは、その主に願い、寄り頼みつつ、この世界のあらゆる違いを超えて平和を告げることです。